

学年・教科：

単元名：

時	内容	活動	有効であった点	改善を要する点	子どもたちの反応
1	工芸品についての言葉理解	・オーストラリアや日本の「お土産」について考えたことを発表しあいながら、工芸品についての言葉理解を進める。 ・教員が「奈良墨」の工芸品についてのプレゼンを行う（発表見本）	この単元では「工芸品」という言葉が子どもたちにとって、イメージしにくい部分があるため、この言葉についての理解をみんなで深めていく学習を進めたが、子どもたちは、工芸品という言葉と意味をつなげることが実感として十分にできた。	後期教科書が届く前から学習を始めたが、「お土産」とい言葉の導入から、子どもたちは自由な発想で発言を行い、クラスの友達の発言を聞きながら、教員のアドバイスのもと、「工芸品」という言葉に対する理解を深めていくことができた。改善点というか、学習のポイントとしては、しっかり工芸品の言葉イメージを子どもたちに持たせることだと考えている。	自由に気が付いたことを発言することは、日ごろから好きな子どもたちであるが、今回の学習内容についても、自分の思っている事を、自分の言葉を使って発言していた。また「お土産」という導入から入ったので、子どもたちは他の子どもの発言にも興味深そうであった。
2	体験学習	墨や筆、硯などの言葉や使い方を理解しながら、書道の体験を行う。	日本には、目に見える工芸品のほかにも、書道、茶道、柔道、剣道など、日本的な「道」について、筆の使い方、字の書き方などについても、体感できるように学習を進めため、子どもたちはとても真剣に落ち着いて取り組めた。	体験する枚数は2枚だったので、子どもたちは集中しながら慎重に取り組んでいたが、枚数については検討してもよいと考える。体験は、子どもたちにとって実感として残りやすいが、ほかの体験でもよいかもしれない。	単に書道という時間ではなく、書道をするときの心構えや、書き方などの学習も含めての体験であったため、子どもたちはとても真剣に取り組む様子が見られた。
3	工芸品調べ発表	日本の工芸品について各自ホリデー中に調べたことを発表しあう。	発表した内容について、それぞれ問題を出し、班ごとに話し合いながら答える形式にしたので、子どもたちは楽しみながら発表を聞き、班の友達とも協力し合いながら活動できていた。	各班のポイントが、可視化できるようにしてもよかったですとを考えている。	クラスの友達の発表については、普段からよく聞くことができているが、クイズ形式にすることで、さらに細かい点についても聞く様子が見られた。
4	工芸品調べ発表	同上	同上	同上	同上
5	教科書学習	教科書を使って、さらに工芸品の学習を深めていく。	子どもたちは「工芸品」の言葉理解を既に深めているので、教科書の大きな流れを	教員の発表見本で、教科書の内容での工芸品2点とも取り上げてもよかったです	教科書の内容について、大きな流れをつかめることは、細かい言葉の理解を

		語句の確認等	つかみやすいようであった。	ない。	容易にしている面もあるように感じた。
6	教科書学習	説明文の構成を復習する。 ・段落分け ・はじめ・中・終わり ・説明をするときに使う言葉の役割 ・言葉の意味をプリントで復習	子どもたちは、工芸品調べや発表を通して、工芸品についての理解が深まっているため、教科書を読んで、さらに 2 つの工芸品についての学習をしているという流れであったため、教科書に内容についてイメージを持ちやすいようであった。	教員の発表見本で、教科書の内容での工芸品 2 点とも取り上げてもよかつたかもしれない。	前年度教科書が新しくなって、本単元を扱ったときに、子どもたちは「工芸品」という言葉理解が実感として理解しきれていなかったように感じていたので、今年度は「キーワード」になる言葉の理解を進めたことにより、子どもたちが理解しやすい様子であった。

伸ばせた力、子どもの変化、保護者の反応など

この単元を通して、子どもたちが日本に関する理解を進めることができたのは、単に教科書の内容だけにとどまらない学習の機会に繋がったと考えている。

もちろん保護者も関わりながらのリーフレット作りにはなっている部分も多いと思うが、そのような経験を通して調べることや、リーフレットを作り、日本語での発表につなげていく学習を通して、実践的に日本語での学習実践になっていると考える。

子どもたちの発表は、今回の「工芸品調べ」だけではなく、年に 3 回ほど発表を行っているが、毎回子どもたちの調べ学習やリーフレット作りに力が入っていく様子も伺われる。

所感

学習を進めていくときに、発言も含めて子どもたちがより体験的・実感的に学習を進めていくことによって、学びが深まっていくように感じている。年間 36 回という限られた学習環境の中で、教科書を学習するというよりは、教科書を通して何を学ぶかということに焦点を当てながら、学習計画を練り続けていきたいと考えている。